

〔報 告〕

ブータンの崖寺と瞑想洞穴

Cliff Monasteries and Meditation Caves in Bhutan

吉田 健人・浅川 滋男

YOSHIDA Kento, ASAKAWA Shigeo

要旨：8世紀、チベットからブータンに密教がもたらされる。北インドの僧パドマサンバヴァがチベット経由でブータンに南下し、タクツァン僧院で瞑想し悪霊を浄化した。この最初期の宗派をニンマ派（古派）といい、パドマサンバヴァ（グル・リンポチェ）は今でも絶大な信仰を集めている。11世紀以降、チベットから諸派が南下して布教を競ったが、13世紀にパジョ・ドゥゴム・シクポの伝えたドゥック派が勢力を拡大し、17世紀になってほぼ全土を制圧する。この結果、ブータンという国家が生まれ、多くの僧院に本堂ラカンが建立され始める。本堂が多くは存在しない時代にあつて、僧侶たちはもっぱら瞑想修行に励んでいた。瞑想の場所として重んじられたのが高山の崖に掘り込まれた洞穴である。洞穴での瞑想は、今でも活いきと継承されており、インドの初期仏教を彷彿とさせる。2012年以降2015年までブータンで4度の調査をおこない、崖寺と瞑想洞穴に係わるデータを蓄積してきた。本稿では、2014年までに調査した西ブータンの6寺、中央ブータンの4寺の成果を報告し、瞑想についての予備的考察を試みる。

【キーワード】 ブータン、チベット仏教、密教、瞑想、洞穴、崖寺、鳥葬

Abstract : In 8th century, Esoteric Buddhism was conveyed from Tibet to Bhutan. Buddhist priest Padmasambhava from north India went south to reach Bhutan via Tibet and meditated at Taktshang monastery and purified some negative spirits. This earliest denomination is called Nyingma sect (old sect), and Padmasambhava (Guru rin po che) still attracts great faith. After 11th century, various sects went south to Bhutan from Tibet and competed for propagation. The Druk sect which Phajo Drugom Zhigpo conveyed in 13th century enlarged the power and after 17th century it gained almost all the lands under control. As a result of religious unification, a nation called Bhutan was founded, and main hall of monasteries became to be constructed in the many precincts. In the times when the main hall of Buddhist monasteries had almost never existed, priests were devoted to meditation practices. The caves on the mountain have been respected as a place of the meditation. The meditation in the caves is still succeeded lively, and it reminds of the ancient Indian Buddhism. The authors have investigated four times in Bhutan from 2012 to 2015, and accumulated data about the cliff monasteries and the meditation caves. In this paper, the authors report the outcomes about six monasteries in west Bhutan and four monasteries in central Bhutan investigated before 2014, and try preliminary consideration among the meditation.

【Keywords】 Bhutan, Tibetan Buddhism, Esoteric Buddhism, Meditation, Caves, Cliff monasteries, Sky burial

1 研究の目的と概要

1-1 ブータンという地域-地理と自然

ブータンはヒマラヤ山脈の麓に位置する面積約38,000 mi^2 の小国である。国土の北側は中華人民共和国チベット（西藏）自治区、他の3方はインドに囲まれた内陸国で（図1）、人口約70万人の多民族国家である（公用語はゾンカ語と英語）。ヒマラヤ山麓にあつて地形の起伏は激しく、南は標高150mのインド平原、北は標

高7,300mのヒマラヤの峰々を包含するので、極端な北高南低を呈し、それが気候・植生・文化の多様性を生み出している。すべての河川は深い渓谷を刻みながら北から南へと流れ、インドのブラマプトラ川に流れ込む。

標高3,000m以上の北部高山地帯はヒマラヤ山脈のツンドラ気候である。中国国境の大部分はヒマラヤ山脈のどこかを走っており、国境線が定かでない部分もある。ヒマラヤ山脈東部の主稜線は万年雪と氷河に覆われてお

り、国土の7.5%にも及ぶ。膨大な水を蓄える氷河は巨大な自然の貯水池でもある。南部は標高200m~1,500mの亜熱帯気候で、蒸し暑い東南アジア的な気候・植生を示し、ほとんどが森林で覆われている。南北の中間にあたる中部のモンスーン気候は、標高1,500m~3,000mの山岳地帯である。首都ティンプーや空港のあるパロ、プナカ、プンタンなどの主要都市がここにあり、ブータンの政治・経済・文化の中心をなしている。中部は照葉樹林帯に属しており、カシ林を主にする常緑樹もしくはは2次林のマツが密生している。ブータンの高山帯を覆う万年雪や氷河から融けだす膨大な量の水と、季節的な降雨が織り重なって、ブータンの国土を溪流が刻み込み、急峻な山系と深い渓谷を形成していった。渓谷と稜線によって複雑な陰影がつけられ、高度が同じであっても、日陰と日向では局地的な気候条件がかなり異なっている。そのため、著しい植物の多様性を示す。

植生豊かなブータンではあるけれども、主要な河川の中流域に植生の貧弱な乾燥地帯が存在する。ここでは森林伐採をせずとも土地を確保できるため、土木建築工程の労力と手間を大幅に省くことができた。それにより、ラカン（僧院）やゾン（城）のような大規模建造物の造営にうってつけの地勢である。また、この乾燥地帯はしばしば照葉樹林帯と針葉樹林帯（おもにイトスギ林）との中間に位置している。ゾンの多くがこの中間地点に位置しており、照葉樹と針葉樹の異なった部材を有効に活用し建立されたものと考えられる。

ヒマラヤ山脈南斜面の全域において年間降水量はきわめて多い。モンスーンに水蒸気を供給するベンガル湾に近いことから夏の降水量はとくに多く、ブータンの気候に明快な雨季と乾季をもたらした。一般に雨季は5月中旬から始まり、8月末~9月上旬に終わる。このあたりの気候特性は東南アジア的であり、その影響は軒と桁端（けらば）の深い大屋根の構造などに影響を与えている^{*1}。

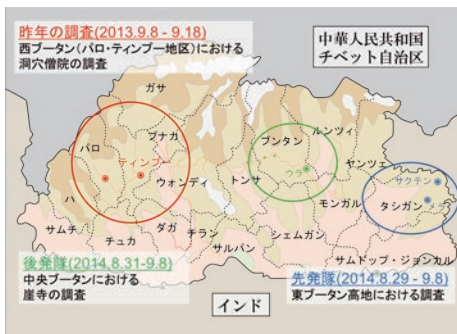


図1 ブータン王国 位置図
(参考サイト9をもとにリライト)



図2 仏教に敵対する魔女を釘付けするため12の僧院が築かれた(7世紀)
チベット(腹より上)・ネパール(右足)・ブータン(左足)
(原図はジャンバラカカンより寄贈)



図3 パドマサンバヴァ像
(中国青海省センゲマンゴ上寺弥勒菩薩殿)

1-2 ブータンの歴史と仏教

チベットを中核とするヒマラヤ山麓に仏教が伝わったのは7世紀前半に遡る^{*2}。吐蕃の王ソンツェンガンボ(Songtsen Gampo)がチベットを統一し、唐とネパールから嫁いだ文成公主とチツンの薦めで仏教に帰依した。吐蕃の首都ラサにはトゥルナン寺(大昭寺)が建立された。ブータン地域のキチュラカン(パロ)とジャンバラカカン(プンタン)もソンツェンガンボの開山と伝える古刹である(図2)。

8世紀中期になって、北インドの僧パドマサンバヴァがチベットに密教を伝え、ブータンを2度訪問する(図3)。伝承によれば、パドマサンバヴァはパロのタクツァン僧院で3ヶ月間瞑想し悪霊を浄化した。密教を伝道したパドマサンバヴァこそがブータン仏教の開祖とされ、後にグル・リンポチェと尊称され今に至る。グルの宗派をニンマ派(古派)と呼ぶ^{*3}。ニンマ派の布教前後、ブータンは遊牧民の放牧地であり、「国家」としての体制は整っていなかった。当時の人びとはボン教を信仰していた。その結果、ニンマ派仏教はボン教の要素を少なからず含んでいる。

11世紀になると、チベット仏教諸派がブータン地域に南下し、布教を競い始める。その中で、次第にドゥック派が勢力をひろげ、13~14世紀に首都周辺の西ブータン、17世紀にほぼ全土を制圧することで、ブータンという国家が誕生した。山野に点在する僧院の多くは、13~17世紀に開山されたものである。

このように、ブータンの歴史は有史以来、仏教とのかかわりが深く、現在の国名も17世紀以降優勢となった宗派の名に由来するほどである。ゾンカ語でブータンおよびブータン人の正式名は、それぞれ以下のような伝説に因む。12世紀末、ツァンパ・ギャレー(1161-1211)が中央チベットに新しい寺を建立していた時のことである。極右から突然雷鳴がとどろいた。雷は龍(ドゥック)の鳴き声であると信じられており、それゆえにギャレー

はこの寺をドゥックと名付け、自ら開祖となった。この宗派の人々をドゥックパと呼ぶ。ブータンは17世紀以降、ドゥック派の下に国家として統一されたので、国名はドゥックユル（龍の王国）、国民はドゥックパ（龍を信仰する人々）と称することになって今に至る。

紀元前6～5世紀ころ釈迦によって成立した古代インドの仏教は、その後北伝の大乗仏教と南伝の上座部仏教に枝分かれする。7世紀になると、大乗仏教の中で陀羅尼や真言を重視する密教が生まれ、中国、日本、チベットに伝播する。チベットを中核とするヒマラヤ山麓の密教はその中でも後期のものである。チベット系密教の総本山たるラサは中国共産党政府によって1959年に「民衆化」され、宗教活動が禁止されるとともに多くの貴重な宗教施設・文化財が破壊された。一方、同じヒマラヤ山麓でもネパールはヒンドゥー教の影響が強く、ラダックとシッキムはインドに併合され独自性を失いつつある。こうした中で唯一ブータンだけが密教国の伝統を保持しており、大乗仏教を国教とする唯一の国家となった。

1-3 研究の経緯と目的

(1) 仏教・石窟寺院の起源と瞑想洞穴

本研究は、ブータン高地の岩山に形成された崖寺（drak geompa）と瞑想洞穴（draph）に焦点をあてている。筆者らがブータンの崖寺と瞑想洞穴のあり方に執着するのは、初期仏教との連続性をイメージしているからである。ブータンでは17世紀のドゥック派による建国以前、各地に多数のチベット仏教僧院が存在したが、ごく一部の例外⁴⁴をのぞいて（図2）、仏像を祀る本堂ラカン（lakhang）は存在せず、もっぱら瞑想修行に励んでいたと言われる。瞑想の場所として重んじられたのが高山の崖に掘り込まれた岩陰・洞穴であり、そこで僧たちは瞑想に没頭していた。そうした姿は、本堂が建立されるようになった今でも生きいきと継承されている。このような洞穴等における瞑想修行への傾斜こそが古代インドの初期仏教を彷彿とさせるものだと筆者らは考えている。インドで仏教が誕生した紀元前6～5世紀ころは經典も仏像も寺院もなく、瞑想することに修行の根本があったと思われるからである。

これに関連して、石窟寺院の起源についても関心を抱いている⁴⁵。石窟寺院については、これまで北伝の大乗仏教を対象に研究が蓄積されてきたが、紀元前に遡る西インド初期の石窟寺院が僧坊窟のみという考古学的事実を重視するならば、チベット仏教の瞑想洞穴や上座部仏教の洞窟僧院を軽視できない。ストーパ（塔）・仏堂・仏像を伴わない初期の石窟寺院の姿をチベット仏教や上

座部仏教の洞穴／洞窟僧院が継承している可能性を探る必要がある。

(2) ブータン建築に関する研究史

ブータンの歴史的建造物に関する調査研究は日本の研究者が先駆的役割を果たしている。最も早い動きをみせたのは、宮脇檀ら建築家のグループである。中央ブータンの中心地プンタンを訪ね、「ヒマラヤ山麓の人と空間」を主題に位置づけてデザインサーベイを駆使し、見事な図面を作成している⁴⁶。デザインサーベイ系で宮脇らの仕事を受けついだのは、千葉工業大学ブータン伝統住居実測調査団の三部作であろう。多くの学生を動員しておびたしい数の民家を実測調査している⁴⁷。その努力には敬意を払うけれども、歴史・文化的な考察は多くない。一方、建築史学・文化財保存の立場から最初に調査をおこなったのは斎藤英俊を代表者とする科学研究費のグループである。調査対象はゾン（城）・ラカン（寺院）・チョルテン（ストゥーパ）などの政治・宗教施設から民家集落に及んでいる⁴⁸。この成果を文化庁建造物課が受け継いで同系列の報告書を残している⁴⁹。

管見の限り、ブータン国内で建築の通史や詳細な調査報告が刊行された例を知らないが、1冊だけ異彩を放つ著書がある。それは中央ブータン、タン溪谷の上流にあるウゲンチョリン民俗博物館の図録に相当する書籍である⁵⁰。この博物館はウゲンチョリン領主の邸宅であった。創建は16世紀に遡るが、大火により19世紀に再建されたという。編者の一人であるクンサン・チョデン女史はブータンを代表する民話／絵本作家であり、博物館は彼女が生まれ育った実家である。父親はウゲンチョリンの領主であり、女史の代表作『ブータンの民話と伝説』⁵¹の前書には、父親が領主であったため、孤独な幼少時代をすごしたことを切なく記している。女史は博物館化する領家の図録編集に携わり、おもに文化史的な立場からウゲンチョリンの村と領家について概説している。建築については、フランスの修復建築家、ピエール・ピチャードが担当し、見事な図版とともに領家の建築的特質を説いている。

以上の先行研究は、ブータン建築の研究史を彩る重要な業績ではあるけれども、ブータン仏教の本質に係わる崖寺・洞穴・瞑想の問題に着目した視点をもっていない。それだけ筆者らの調査研究はオリジナリティの高いものだと自負している。

(3) 調査の経緯

2012年から2015年にかけて毎年ブータンを1～2週

問訪問し、各地の崖寺と瞑想洞穴を調査してきている。2012年9月の第1次調査は浅川が単独で西ブータンを訪問した。ブータン仏教発祥の地と伝承されるタクツァン僧院（タイガーズネスト）をはじめいくつかの崖寺・仏教遺産を踏査し、現地的人的コネクションを確立した。2013年の第2次調査では13名の教員・学生が参加し、西ブータン（パロ・ティンブー地区）の崖寺6寺、平地寺院1寺の計7寺を調査した。本堂ラカン等の建築部材から科学的年代測定サンプルも採取している。2014年の第3次調査は2隊に分かれた。先発した東ブータン隊はメラの高地ヤク放牧民の住居集落と仏教寺院を調査したが、高山病と大雨に悩まされ、トレックによるサクテンへの移動を断念した。後発隊は中央ブータンの中心地プンタンで先発隊と合流し、崖寺4寺及び高地集落の調査をおこなった。2015年の第4次調査では、西ブータンの崖寺を3寺、中央ブータンの崖寺を1寺調査した。中央ブータン・タン溪谷の奥にあるメンバツォ（後出）とウゲンチョリンを訪れ、クンサン・チョデン女史の実家（領家）を改装した民俗博物館も訪問している。

本稿では、原則として2013～2014年の成果を報告し（図1）、崖寺と瞑想洞穴に関する予備的な考察を試みるが、ときに2015年の成果で補う場合もある。

(4) 崖寺を理解するためのキーワード

次章では地域別にブータンの崖寺と瞑想洞穴に関する調査成果を報告するが、それに先だって説明しておきたいことがある。すでに何度も述べてきたように、筆者らは崖に沿って建つ山林寺院に重点を置いて調査を続けてきた。その結果、山林寺院の呼称にドラ（drak）という言葉を含むものが少なくないことに気づいた。ゾンカ語（ブータンの公用語）で「崖」を意味する言葉である。たとえば、中央ブータンの有力な山林寺院であるクンサンドラ（Kunzang drak）、シュクドラ（Shuk drak）、チュードラ（Choe drak）、トワドラ（Thouwa drak）は



図4 休憩所（5合目）から見上げたタクツァン僧院

いずれも寺名に drak を含んでいる。これらを直訳すれば、クンサン崖、シュク崖、チュー崖、トワ崖となるが、実際にそれらはすべて崖寺（drak geompa）を意味している。すなわち、drakには「崖」と「崖寺」の両方の含意があることを知っておくべきであろう。

それでは、なにゆえブータンの山林寺院は崖に造営されるのであろうか。これは本稿の本質に係わる問題なので、最後にもう一度考察することになるけれども、崖に形成された岩陰や洞穴を主要な瞑想の場所とするからである。こうした小さな瞑想洞穴をドラフ（draphu）と呼ぶ。ドラフにも dra がついており（k 音省略）、「崖」と関連する施設であることが分かる。ドラフのフ（phu）は「小さな空間」を意味する。つまり、ドラフとは「崖の小さな空間」であり、具体的には、崖に造営された瞑想洞穴のことである。僧侶はオープンな洞穴もしくは岩陰で瞑想するわけではない。洞穴・岩陰は小さな木造の建物によって塞がれている。窟（いわや＝岩屋）の正面に木造の掛屋（かけや）を設け、全体としては懸造（かけづくり）の建物が洞穴・岩陰に食い込むようになっている。その点、三仏寺投入堂など日本の懸造仏堂と風貌が近い。内部に入ると、背面には岩肌が露出し、表面は木造の高床建築になっている。

こうした懸造の構造は、多くの崖寺の本堂においても踏襲されている。急峻な斜面地形への適応を考えれば、当然のことであろう。さて、ブータンにおいては本堂等に参拝し内陣に入室することはできるけれども、写真撮影や実測調査などは強く禁じられている。瞑想洞穴ドラフに至っては内部に入ることも許されない。こうした規制のため、現地調査は崖寺の空間構成を把握することに主眼を置き、境内配置図の作成を第一とした。このほか比較的事実しやすいのは外部から写生可能な立面図である。しかし、ごく稀に本堂等の内部調査を許可される場合もある。数は多くないけれども一部の本堂・瞑想洞穴については、正式の許可を得て平面図や断面図を実測し

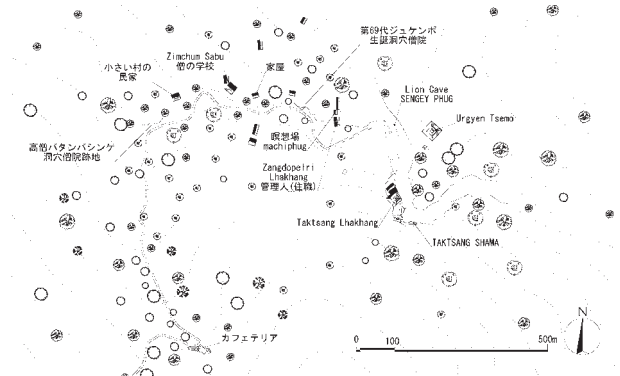


図5 タクツァン僧院 屋根伏図

ている。この他、僧侶に対するヒアリングを各寺でおこない、科学的年代測定のための年輪チップの採取、様式編年に資する建築彫刻紋様の拓本採取にも取り組んだ。

2. 西ブータン（1）—パロ地区の崖寺

2-1 タクツァン僧院

(1) パドマサンバヴァの伝説

タクツァン僧院はニンマ派の総本山であり、パロ地区北部に位置する。岩山の頂に近い崖に形成された岩陰・洞穴（標高3,050 m）を利用して壮大な本堂ラカンを構える（図4・5）。タクツァンを開山したのはパドマサンバヴァとされ、さまざまな逸話が残っている。ブッダは臨終に際し、「パドマサンバヴァとしてウゲン国に転生する」との予言を残した。それから千年ばかり経て、ウゲン国の湖に生える蓮の中でパドマサンバヴァは生誕した。ブッダの生まれ変わりということである。パドマサンバヴァはブッダと同じく、国王の地位と王妃を捨てて出家し、偉大な「師（グル）」と尊称されるようになる。グルがチベットを経由し初めてブータンを訪れたのは西暦746年のことであった。中央ブータンのブンタンで苦境に陥ったセンダ・ギャブを八相変化によって救い、いったんブータンを去る。その後、チベット経由で西ブータンの山林に再入山し、タクツァン僧院の洞穴で3ヶ月間瞑想して悪霊を鎮圧した。以後、タクツァン僧院はブータン仏教ニンマ派（古派）の拠点となる。

伝説はこれをさらに脚色している。パドマサンバヴァは虎の背中に乗って東ブータンのクルテ地方から飛来し、恐ろしい形相（忿怒相）のドルジ・ドロに変化してパロ地方の悪魔を調伏し、仏教に改宗させたという。こうした縁起からタクツァンに「虎の巣（タイガーズ・ネスト）」の異名が与えられたのである。パドマサンバヴァが瞑想に励んだころ、山上の巖崖に本堂などの大きな建物は存在しなかったと言われる^{*12}。僧侶たちは洞穴での瞑想に没頭していたとされ、おそらくドラフなどの小型

懸造の施設が点々とあったのだろう。12～13世紀のチベット仏教諸派の布教期に建立された仏堂が2棟奥の方に残るが、前側の本堂の創建は1692年まで下る。まさにドゥック派による国家形成期に相当する。その本堂も1998年に火事でほぼ全焼した。2004年に再建され、被災前の姿に戻したものの、以前より規模がやや大きくなったと聞いている。

(2) 虎の巣をめざして

調査隊はこれまでタクツァン僧院に2度参拝している。2012年は浅川の単独登攀であり、2013年は参加した13名全員が測量器材等を担いでの強行軍であった。登山口は標高2500 mの林の中に位置する。パロ・ティンブー地区の一般的な谷筋より200～300 m高い。登山口では、眼前に屏風のように迫る岩壁が霧で見え隠れする。山頂近くに白い壁の建物群がわずかに見通せる。岩壁はほぼ垂直に立ち上がり、登山口との比高差は約500 m。出発からまもなく植生の変化に気がつく。とろろ昆布のような緑の膜がイトスギに巻き付いて風になびいているのだ。苔の一種である（図6）。その名前を訊ねてみたが、有能なガイドでさえもよく知らない。たまたま同行していた運転手（パロ郡ゲムジャロ村出身）が土地の言葉で「チャイラップ」ということを教えてくれた。日本では見ることのない高山の森林風景である。歩き始めてから約1時間、カフェテリアが併設された第1展望台にたどり着いた。標高2,845 m。屋外のベンチに座ると、眼前には、僧院をはじめ13の聖地（堂宇）が散在するパノラマが広がる。ここで測量器材を設置するも、レーザー光線は谷向こうの僧院まで届かなかった。目で捉えているよりも実際の距離は遠いのである。

(3) 第69代ジュケンポ生誕瞑想洞穴など

登山を再開してしばらくすると、パタンパ・シンケという高名な僧が瞑想したという洞穴跡地に到着する（図



図6 イトスギに巻き付く苔
（チャイラップ）



図7 パタンパシンケ洞穴僧院跡地
（タクツァン僧院）



図8 第69代ジュケンポ生誕瞑想洞穴
（タクツァン僧院）



図9 タクツァン僧院本堂ラカンの外観



図10 タクツァン僧院 瀑布と獅子洞穴（ライオン・ケイブ）

7)。懸造の木造建築部分はすでになくなって遺跡化している。洞穴の寸法は間口14.27 m × 高さ6.50 m × 奥行39.50 m。標高約3,000 m。やや上手に湧水地を伴う。この洞穴から先には建物が点在し始める。まもなく懸造の掛屋で塞がれた瞑想洞穴ドラフに至る（図8）。木造建築部分の間口2.34 m × 高さ2.00 m。刻梯子で昇殿するようになっている。金網張りの窓から覗くと、たしかに洞穴らしき岩肌を確認できる。第69代ジュケンポ（座主）生誕の場所であり、現在も別の僧侶が瞑想修行する施設であり続けている。ちなみに、現在のジュケンポは第72代である。

その後しばらく歩くと、9合目（峠）の第2展望台に至る。谷を隔ててタクツァン僧院が眼前に迫るが（図9）、そこからの道のりがまた厳しい。第2展望台から長くて急な石段を下り、滝のしぶきを浴びながら谷底に架かる橋を渡る。その正面の入隅の崖上にライオン・ケイブ（獅子洞穴）がある。いびつな形の掛屋が洞穴を塞いでおり、ここでもまた僧侶が瞑想するという（図10）。

そこから200段ほど階段を上り僧院の入口にようやく至る。僧院には、貴重品以外持ち込み禁止であり、撮影は厳禁。荷物をクロークに預け、再び境内の石段を上る。石段が一種の中庭的空間になり、その向こうに数棟の建物が軒を連ねる。最高所のテラスは標高3,035 m。眼下

にパロ川流域の全景を一望できる。俗世間から隔絶した場所でありながら俗世間を視界に納め、逆に俗世間からは瞑想修行の場を意識できる絶妙な配置関係である。

2-2 ダカルポーゲムジャロ寺

(1) ダカルポ僧院群

ダカルポ（Drakharpo）という呼称は本寺の固有名称ではない。ドゥック派の開祖、パジョ・ドゴム・シクポがパロ地区に開山した一連の瞑想場を包括する総称である。Drakharpo もまた drak(崖) という語彙を含んでいる。村人は寺をゲムジャロ（Gemjalo）と呼ぶが、本来はゴムドラ（Gomdrak）が正しい寺名であるという。ゲムジャロは山麓の村の名前でもある。

ダカルポという名前の崖寺は溪谷の標高より200～300 m 高い標高2,500 m 前後の山肌に点在している。2013年調査のダカルポーゲムジャロ寺は谷を挟んでダカルポ・ヨウト（Youtok）寺と対面しあう位置関係にあり、中間の谷筋には瞑想洞穴を集中させている。2015年調査のヨウト寺はデータの整理中であり、本稿では触れないこととする。

(2) 本堂ラカンの構成

ゲムジャロ寺は崖下に形成された平場の境界に木柵と



図11 ダカルポーゲムジャロ寺

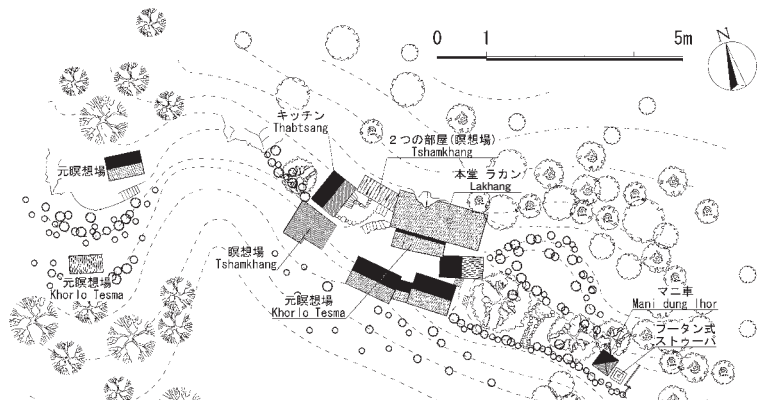


図12 ダカルポーゲムジャロ寺 屋根伏図

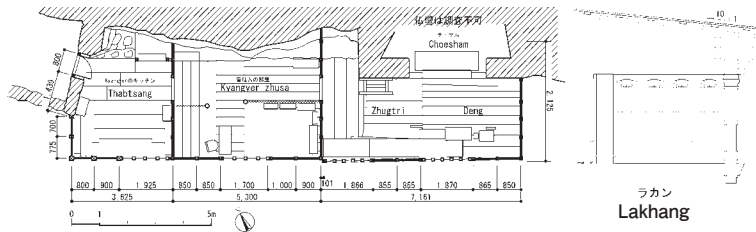


図13 ダカルポーゲムジャロ寺 本堂平面図



図14 ダカルポー本堂内部 調査風景

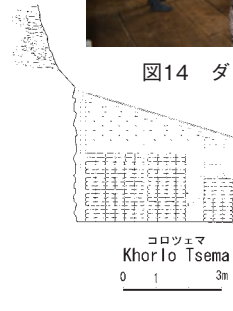


図15 ダカルポーゲムジャロ寺 本堂・コロツェマ 連続側面図

門、その内側にチベット式チョルテン（ストウパ）を設ける。境内の主要な施設は導入場所から東西方向横一列に並ぶ。平場は奥行が非常に短く、大半の建物が懸造の形式をとっている（図11・12）。山側の壁は崖の岩肌が露出しており、谷側は木造の高床式とする。ブータンでみた僧院の中では最も床下の丈が長い懸造という印象がある。ゲムジャロ寺の住職、キャンギャ（Kyangyer）さんは非常に寛容な方であり、内部の撮影については仏像が写らないなら可、平面図の実測も許していただいた（図13・14・15）。

横長平面の本堂は3室4空間に分節されている。入口のある西側から厨房タブツァン（thabtsang）、住職の寝室チュサ（zhusa）、釈迦如来を祀る仏壇をチェサム（choesham）、その正面のスペースをデン（deng）、デンの脇座をチユグトリ（zhugtri）という。ちなみに、小さな山寺なので、僧侶はキャンギャさん一人しかいない。

(3) ツァムカンとコロツェマ

ゲムジャロ寺では本堂ラカンの周辺に瞑想施設と元瞑想施設が軒を連ねている。瞑想施設はドラフ（draphu）ではなく、ツァムカン（tshamkhang）と呼ぶ。ツァムカンとは「瞑想（tsham）^{*13}する建築的な空間（khang）」のことであるが、崖の洞穴と複合するか否かを問題としない。ゲムジャロ寺の場合、独立した木造懸造の建物になっている。一方、ドラフは崖の洞穴と複合する瞑想場をさす。ツァムカンはドラフを包含する概念と思われる（表1）。

現在なお瞑想場として使われているのは3棟で、2013年の調査中にも一人の尼僧が瞑想修行の準備を進めていた。瞑想の邪魔をしてはいけないから、ツァムカン脇の抜け道を通る際は息を潜めて歩いた。抜け道の対面には修行中の僧・尼僧をサポートする家族の控え室もある。瞑想場の周辺には5棟のコロツェマ（khorlotsema）を配している。コロツェマは元瞑想場で、退職した老人たちが読経して晩年を過ごす。歳をとって瞑想修行はできなくなってしまったが、コロツェマで読経に専心するのである。こうした老人たちは死に至るまで読経をやめな

い。仏を祈り清らかな晩年を送ることにより、来世もまた人間に生まれ変わると信じているからである。

(4) 放射性炭素年代測定サンプルの採取

ゲムジャロ寺本堂で古そうな部材を探し、放射性炭素年代測定（AMS法）のサンプルを採取した。サンプルを採取したのは本堂2階の扉敷居材（蹴放）である（図17）。以下に基本情報を示す。

ゲムジャロ寺本堂2階の扉敷居材（蹴放）PLD-25100

材種等： マツ属・心去材・心材型

採取位置： 一番外側の年輪（総年輪数54）

年代測定結果： 1691 - 1729（信頼性26.7%）

1810 - 1920（信頼性68.7%）

辺材を含まない心材型であるため伐採年代は不明だが、1691年以降の伐採であることは確定しており、1810年以降の伐採・建築である可能性がやや高いと思われる。いずれにしても、17世紀のドゥック派による国家形成以降の建造物であるのはほぼ疑いなく、通説に矛盾するものではない。

地区	僧院名称	瞑想場呼称	壁色	洞穴
パロ	ダカルポーゲムジャロ寺	ツァムカン (tshamkhang)	白	無
	ゾンドラカ寺	ドラフ (draphu)	黒	有
	タグツォガン寺	ドラフまたはゲオンカン (geonkhang)	黒	有
ティンブー	タンゴ寺	ジャフ (japhu)	白	有
	チェリ寺 山上	ツァムカン (tshamkhang)	白	有
	チェリ寺 山下	ドゥブカン (dubkhang)	一	有
ブンタン	シュクドラ寺	ツァムカン (tshamkhang)	白	有
	チュードラ寺	ツァムカン (tshamkhang)	白	無
	クンサンドラ尼寺	ドゥブカン (dubkhang)	白	有
ウラ	ガデン・ラカン	ツァムカン (tshamkhang)	黒	有
		ツァムカン (tshamkhang)	白	有

表1 瞑想場の呼称一覧

2-3 ゾンドラカ寺

西岡京治記念チオルテンから見渡せるボンテ山の谷奥にゾンドラカ (Dzongdrakha) 寺が境内を構える (図16)。標高2,525 m。前述のダカルポ僧院群とほぼ同じである。ゾンドラカのゾン (dzong) は「城」、ドラ (dra) は「崖」、カ (kha) は「口」を意味する。ゾンドラカ (Dzongdrakha) の全体では「崖の口 (岩陰や岩窟) になつ城」と訳せる。その名の通り、絶壁を背にして崖際の平場に建物を並べている (図17)。すでに無住寺院と化しており、管理者はいるが、住職はいない。2013年訪問時にはストゥーパ (チオルテン) の修復がおこなわれていた^{*14}。

本堂ラカン (lakhang) は南北に2棟あり、いずれも17世紀以降の造営である (図18・19)。北ラカンの北側に僧が暮らす長屋ジムカン (zimkhang) を伴う。ラカン前の絶壁を挟んで対面には修理中のストゥーパが建つ。このストゥーパは一種のレプリカであり、本堂ラカンの中に本物のストゥーパを納めて祀っている。本堂ラカン内部は、東向きに仏像が鎮座している。壁には千体仏が描かれ、浮彫される。

北ラカンと南ラカンの中間の崖に無数の小洞穴を確認できる。多くは遺跡化し、正面の掛屋を失っているが、本堂の近くに1棟だけ黒色の掛屋をとまなうドラフが残っている。ドラフは壁面を黒く塗り、その上側に赤い帯を通す^{*15}。壁面の赤い帯は相輪とともに仏教関係の施設であることを示す記号であり、黒い壁は「悪霊浄化の瞑想施設」であることを表現する (白壁のドラフは悟りを開くための瞑想施設)。ゾンドラカでは、こうした黒色の瞑想場をゲオンカン (geonkhang) と呼ぶ。ゲオンカンの内部をみることはできないが、廃墟と化した洞穴を覗くと、内部で左右の洞穴が繋がっている。そこにはおびただしい数の骨小塔ツァーツァ (後出) や仏具がばらまかれていた。

設であることを示す記号であり、黒い壁は「悪霊浄化の瞑想施設」であることを表現する (白壁のドラフは悟りを開くための瞑想施設)。ゾンドラカでは、こうした黒色の瞑想場をゲオンカン (geonkhang) と呼ぶ。ゲオンカンの内部をみることはできないが、廃墟と化した洞穴を覗くと、内部で左右の洞穴が繋がっている。そこにはおびただしい数の骨小塔ツァーツァ (後出) や仏具がばらまかれていた。

2-4 タグツォガン寺

タグツォガン (Tagchogang) 寺はブータンを訪問する外国人旅行者が最初に訪れる景勝地である。パロ空港から首都ティンブーに至る道筋の途中、必ずこの地点で停車し、旅客はタグツォガン寺を遠望する。高山・崖・溪流・畑・集落などの織りなす風景の魅力を点景としてのタグツォガン寺が倍加させており、旅客は息を呑んでこの風景に見とれる。タグツォガンのタグ (tag) は「馬」、ツォ (cho) は「草」、ガン (gang) は「丘」を意味し、全体で「丘の放牧地」を表す。一山むこうにみえる集落の人たちがかつてこの丘を放牧地にしていたことに因む地名だという。開山は14世紀に遡る。ドゥック派の高僧タントン・ゲルボがブータンで開山した二寺の一つである (図20)。開山時、本堂ラカンはなかったが、タントン・ゲルボは吊橋を造った (図21)。パロ川を渡るワイヤーロープ式の吊橋であり、その橋は修復されな

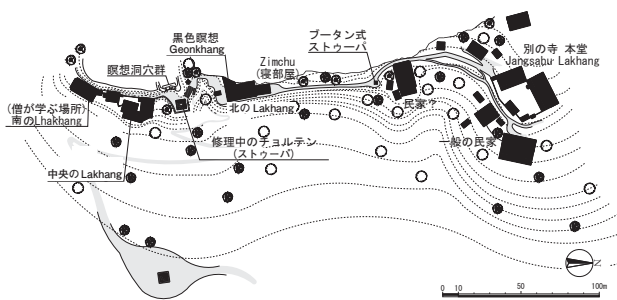


図16 ゾンドラカ寺 屋根伏図



図17 崖下のチオルテンからゾンドラカ寺を見上げる

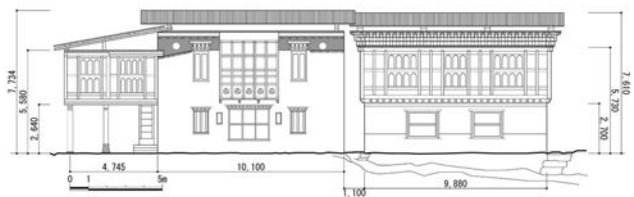


図18 ゾンドラカ寺北ラカン 東立面図

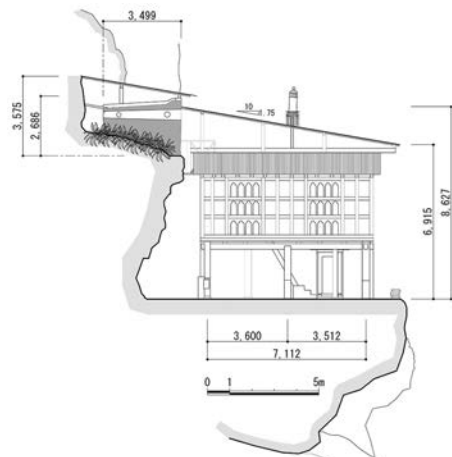


図19 ゾンドラカ寺のドラフ (左) と北ラカン (右) 南側面図

がら存続してきた。本堂ラカンが建立されるのは17世紀以降のことである。

吊橋を渡るとタグツォガン寺の境内であり、小さなブータン式ストゥーパが鎮座し、斜面をあがって国樹イトスギの大本木がそびえ立つ。本堂ラカンには中央に釈迦如来、両脇にグル・リンポチェと観音菩薩を祀る。本堂から200mばかり離れた山側の崖面に瞑想洞穴ドラフがある(図22)。ゾンドラカ寺と同じ黒い壁のドラフで、悪霊を浄化するための瞑想場である。2013年の訪問時は瞑想修行の最中であり、予め近づきすぎないように注意を受けた。ドラフの屋根には白い旗を立ちあげる。風になびく白旗が瞑想中であることを示しており、俗人の干渉は許されない。後述するように、悪霊(英語のnegative spirit)とはボン教の精霊をさす。仏教布教以前に存在したボン教の精霊が「悪霊」であり、その悪霊を仏教の瞑想で浄化しようとしている。

3. 西ブータン(2) - ティンブー地区の崖寺

3-1 僧院のトライアングル

パジョ・ドゥゴム・シクポ(Phajo Drugom Zhigpo)はブータンにおけるチベット仏教ドゥック派の開祖である。パジョは1184年にチベット東部のカムに生まれた。ドゥック派を立ち上げたツァンパ・ギャレイに師事する

も、ギャレイは1211年、ラルン寺で死去する。死に際にギャレイはパジョを派の後継者に指名した。1222年になってパジョはブータンに渡り約1ヶ月間タクツァン僧院で瞑想し、グル・リンポチェの啓示を受ける。曰く、「(パジョは)12の場所で瞑想をおこないながら国中を巡ることになるだろう」。パジョはグルの生まれ変わりとして、妻ソナム・ペルデンを娶り、ともに旅を続け、ティンブー北部のドナデンへ至る。ある日、パジョは馬頭神タンデインの幻を見た。そのため、この地はタンゴ(馬頭)と呼ばれるようになる。

首都ティンブーの北郊上流にあるドデナ(Dodena)地区に境内を構えるタンゴ(Tango)、チェリ(Cheri)、ドレイ(Doley)の3寺は一連の修行場として13世紀に開山した。当時、三つの山の尾根筋と三つの谷筋がぶつかりあう谷底には「悪霊」が跋扈していると考えられていた(図23)。ブータンの「悪霊」とは、仏教浸透以前から信仰されていたボン教の精霊をさす。浄化された悪霊は善なる精霊に変わる。こうした悪霊を浄化するため、チベットから南下したパジョ・ドゥゴム・シクポが三山の尾根筋に僧院を設けたのだという。ある日パジョは7人の子供を橋につれていき急流に放り投げた。溺死した3人は悪霊の化身であり生き残った4人はドゥック派の後継者として以後の布教を担った。この伝説はチエ

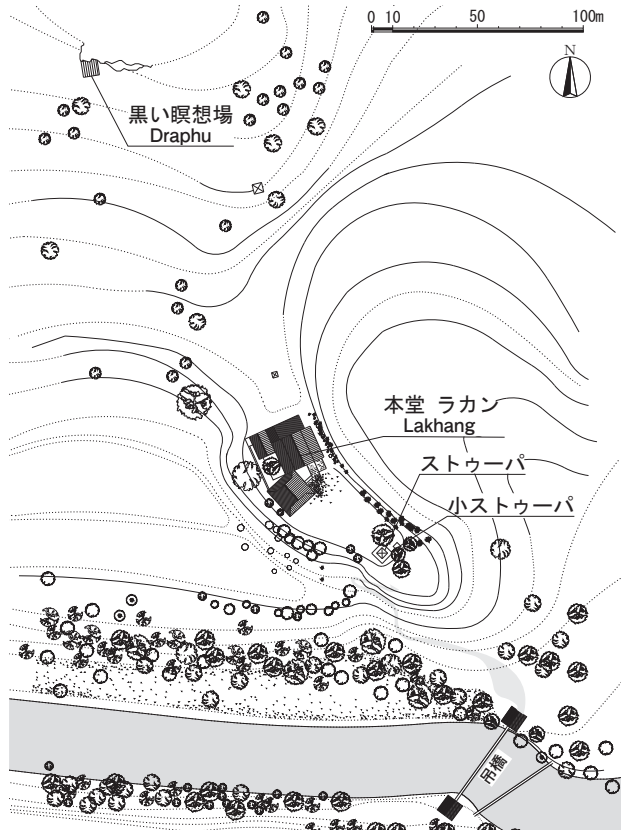


図20 タグツォガン寺 屋根伏図



図21 タグツォガン寺周辺の風景



図22 タグツォガン寺 壁の黒いドラフ



図23 悪霊を浄化する僧院のトライアングル(チェリ-タンゴ-ドレイ)

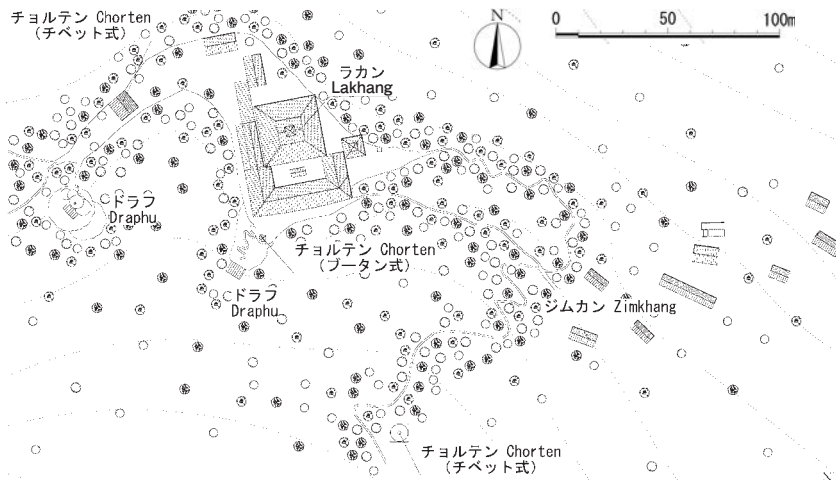


図24 タンゴ寺 屋根伏図

り寺山麓の橋のたもとに彫刻化して展示されている。

パジョが布教し開山したころの三山は瞑想修行する「僧院」ではあったが、いまだ本堂ラカンを備えてはいなかった。17世紀にドゥック派が国教となり、初代ジュケンポ(座主)のサブドル・ナワン・ナムキュル(Zabdrung Nawang Namgyal)が三山に本堂を建立したと伝える。

チェリ、タンゴ、ドレイは仏教大学としての職責も担っている。17世紀以降、僧院の整備が進み、ドゥック派の大学が開校する。ドレイが大学の学部にあたり、3年間仏教の基礎を学ぶ。チェリとタンゴは大学院相当の僧院で、僧は5年間修行する。最後は瞑想である。大学院を修了した若き僧たちは3年3ヶ月3日の瞑想修行を続ける。チェリ寺での聞き取りによれば、1日1食、睡眠5時間以外はただひたすら瞑想をするという。それを3年3ヶ月3日続けることで一人前の僧と認められ、その後は若き僧を教育する指導者の側にまわるのだという。

3-2 タンゴ寺

タンゴ寺は標高2,800 mほどの高山に境内を構える

(図24)。数少ない高等仏教大学でもあり、多くの僧が修行している。本堂ラカンは回廊に囲まれた中庭があり、ドゥック派の聖人を中心とした壁画が全面に描かれている^{*16}。本堂ラカン(図25)は17世紀以降の造営であるが、一度焼失しており、その際に経典・文書等も失った。現存する建物は18~19世紀に再建されたものである。

本堂ラカンのことを古くはゴンパ(geompa)とも呼んだ。ゴンパは3階建になっており、中央の楼閣部分をウチ(utsi)と呼ぶ。ウチはゾン(城)に多用される。王城の空間構成・建築形式が僧院に影響を与えた可能性が高いであろう。本堂内陣中央の仏壇には釈迦像を3体並べる。左から過去、現在、未来(弥勒)の姿を映し出している。礼拝室の横一面に黒い布の壁が垂れ下がっていた。布壁の向こうで悪霊を浄化する瞑想がおこなわれているとのことであった。本堂の内部に密教の領域を伴っていることが分かる。

タンゴ寺にも瞑想洞穴ドラフ(draphu)がある。タンゴ寺の場合、小さめの瞑想洞穴をジャフ(japhu)と呼ぶ。一方、ラカンの東側に複数の赤い屋根の建物が配列され



図25 タンゴ寺 巨岩から本堂ラカンを望む



図26 タンゴ寺 巨岩と相隣



図27 タンゴ寺 巨岩と小型の瞑想洞穴ジャフ(Japhu)

ている。これらの長屋をジムカン (zimkhang) という。ジム (zim) は「寝る」、カン (khang) は「空間」を意味する。僧院の僧房であり、瞑想とは無縁の施設である。

ラカンの東側に屋根に覆われたチベット式チオルテンがあり、そのさらに奥へ向かうと巨巖が崖上に聳えている。その頂部中央に相輪を立てる (図 26)。巖がたんなる岩石ではなく、仏界であることを誇示している。巨巖の下にもジャフ (図 27) を設けるが、上の巨巖からは視界に納まらない。急峻な絶壁に小屋を建て掛けており、この危険な聖地で瞑想に没頭するのである。

3-3 チェリ寺

(1) 境内の構成

タンゴ寺と同様、ティンブー北部郊外上流のドデナ (Dodena) 地区に位置する。タンゴ寺とは川を挟んで相対し、広葉樹林と針葉樹林が分層する標高 2,800 m 前後に僧院の施設が点在する (図 28)。新旧 2 棟の本堂が急峻な岩の斜面に張り出すように建っている (図 29)。最高所に行くためには、2 つの本堂の間を通り、急な石組の階段を上っていかなければならない (図 30)。タンゴ寺やダカルポ僧院群と同じく、17 世紀にサブドル・ナムワン・ナムキュルが建立した本堂で、以後、ドゥック派



図28 山道から見上げたチェリ寺の全景



図29 チェリ寺 本堂ラカン

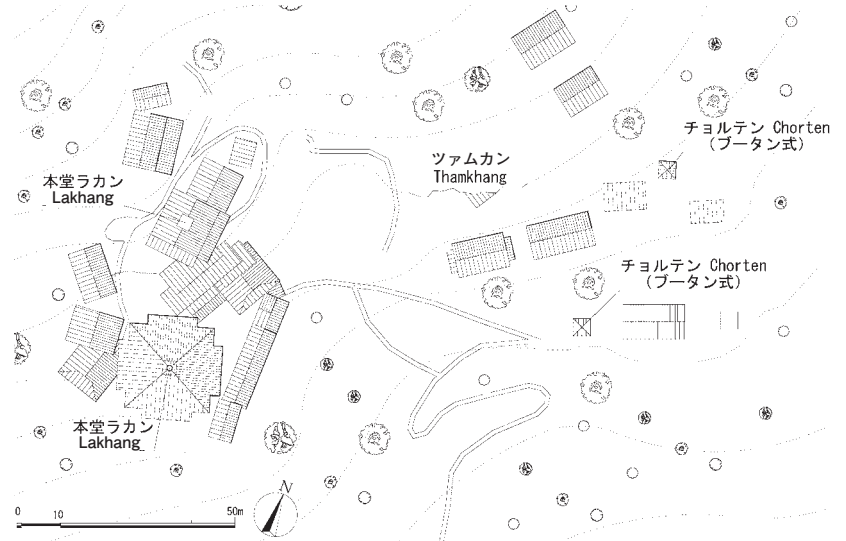


図30 チェリ寺 屋根伏図



図31 チェリ寺山麓のドゥブカン外観



図32 チェリ寺山麓のドゥブカン内部



図35 ドゥブカン内の骨小塔ツァーツァ (白) 庶民 (金・赤) 高僧

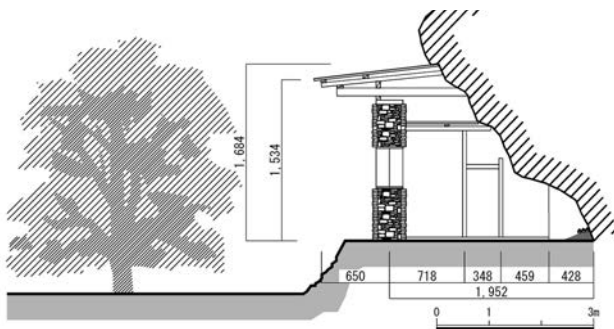


図33 チェリ寺山麓のドゥブカン断面図

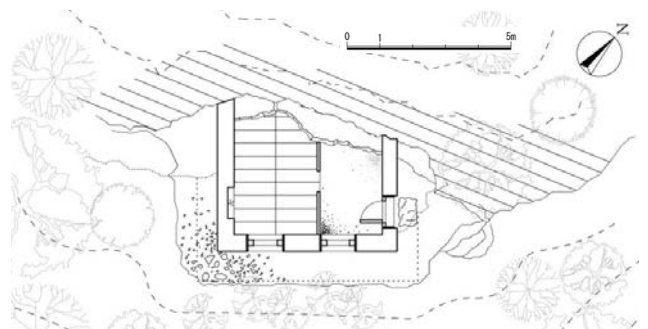


図34 チェリ寺山麓のドゥブカン 平面図

の拠点となった。本堂にはサブドルの父の位牌が残されているという。2棟の本堂の間隙から瞑想洞穴ドラフを見通せる。チェリ寺の場合、瞑想場ドラフをツァムカン (tshamkhang) と呼ぶ。周辺には僧房ジムカンも軒を連ね、みな懸造である。

(2) ドゥブカンとツァーツァ

チェリ寺山麓の巨巖の下に小さな瞑想洞穴を発見した(図31)。そこはドゥック派の開祖、パジョ・ドゥゴム・シクポが瞑想をして悟りを開いたドラフとされ、ドゥブカン (dubkhang) という特別な呼称を与えられている。建物は老朽化が進んでおり、修理の真最中であり、そのおかげで内部に入ることが許された。とても幸運なことである。木造部分が新しくなっているが、瞑想洞穴の内部を観察する最初の経験になった。ここで内部の実測調査と写真撮影をおこなった(図32・33・34)。

平面・断面図にみるとおり、ドゥブカンは巨巖の岩陰を利用した瞑想場であり、正面側を平屋の建物で塞ぐ。入口は妻側にあり、内部は入口側の土間と奥側の板間の2室に分けている。板間の岩陰に多数の骨小塔ツァーツァ (tsetse) を整然と並べ(図35)、小さな仏画を飾る。

ツァーツァは古代日本における百万塔のようなものである。ブータンでは人が亡くなると、供養のためツァーツァを作る。庶民クラスの場合、高さ・幅ともに5cmほどの小さな円錐状の白いストゥーパである。死者は火葬され、遺骨は粉状に粉碎して粘土に練りこむ。ツァーツァの中心には経典を納め、煩惱の数(108)だけ制作する。

死者を供養し極楽往生を祈願するツァーツァは家族が岩陰などの聖地に置くが、2~3年すると風化し土に還る。ブータンでは、輪廻転生の考えが浸透していて、墓も位牌も存在しない。白いツァーツァは庶民の色、金色や赤いツァーツァは高僧の色である。後者は小さな千仏壁画とする場合もある。それをマニ・ツァーツァと呼ぶ。

4. 中央ブータンの崖寺と瞑想洞穴

4-1 シュクドラ寺

シュクドラ (Shuk drak) 寺はブントン郊外タンビ地区チョコル谷に位置する(図36)。車を下りて2時間半ばかり山道を歩くと溪流沿いにチョコマニ (chokor mani) があらわれる。チョコマニとは、水流を利用したマニ車の小屋である。その地点から崖が切り立っており、岩山の裾に小ぶりの本堂ラカンが迫り出している(図37・38)。本堂は2層構造であり、下層レベルの標高3,600mを測る。下層の正面に小さな瞑想施設ツァムカン (tshamkhang) が付属しているが、これは新しいものであり、かつては洞穴が瞑想の場所であった。実際、本堂の裏手には高さ4.4m、幅2.6m、奥行6.3mの大きな洞穴があり、今はそれを重層の本堂が塞いでしまっている。洞穴の中にある木製の階段を使って上層にあがる。上層は間口6.9m×奥行2.4mの横長長方形の掛屋が岩陰を利用した仏壇の前に設けられている。本尊はグル・リンポチェであり、その像は小さな洞穴に納まっている。グルはこの洞穴で瞑想したという寺伝が残る。瞑想を終えたグルは右手と右足の跡を洞穴脇の岩肌に残したとも

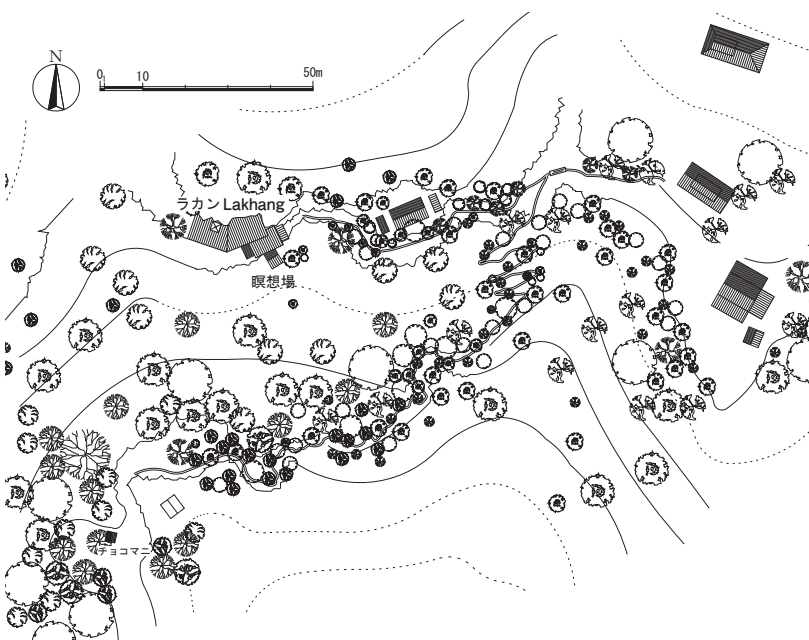


図36 シュクドラ寺 屋根伏図



図37 シュクドラ寺 本堂ラカン外観

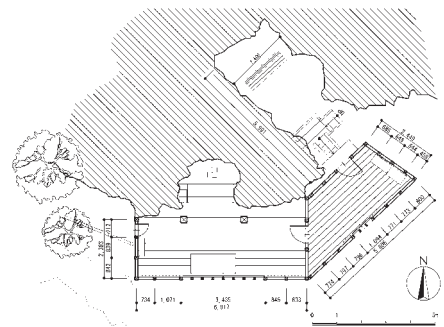


図38 シュクドラ寺 本堂ラカン2階平面図

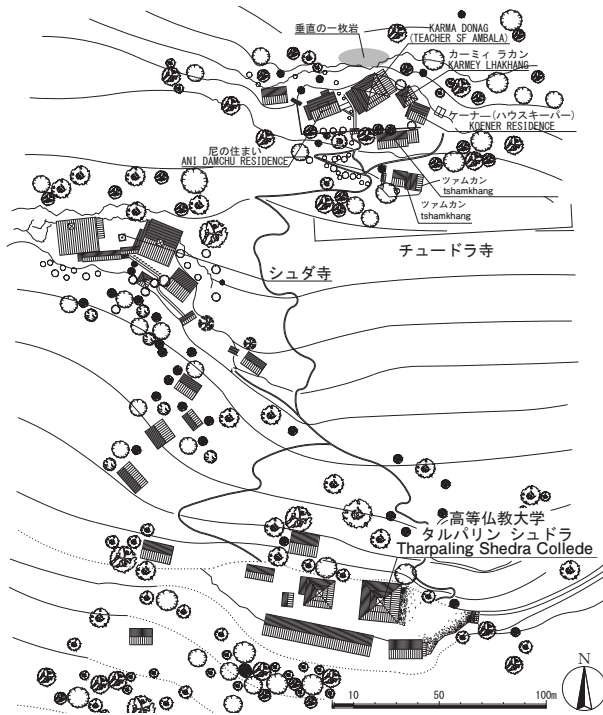


図39 チュードラ寺 屋根伏図

言い、仏壇横の岩場に手形と足形がある。ブータンの古刹として名高いクルジェ (Kurjey) ラカンも、本堂奥の中心部に祀るグル・リンポチェの像は小さな洞穴に納まっており、その洞穴の形はグルの身体形状に即して掘削したものだという伝承がある。真実なのかどうかは詳らかでないが、こうした伝承を残すからには両寺とも元はニンマ派 (古派) であったのだろう。また、瞑想窟の伝承が真実であるとすれば、ラカンはかつて瞑想場であったことになり、瞑想窟が礼拝窟に変化したとも考えられる。グルが瞑想していた洞穴がグル像を礼拝する本堂に変化したということである。

本堂ラカンはこれまで3度の修理を施している。ゾンドラカ寺と同じく、住職のいない無住化した寺院だが、管理人が近隣に居住している。今の建築は現管理人の曾祖父の曾祖父が建立したものであり、以前は管理人の所有物であったが、現在はブータン政府が僧院の所有者に変わっている。管理人一家はラカンの近くに集住し、一族あげてシュクドラを守っている。

4-2 チュードラ寺

チュードラ (Choe drak) 寺はブータン地方チュメ (Chumey) 地区の高山に境内を構える (参考サイト5 / 図39)。境内の下側に登山口があり、そこにタルパリン・シュドラ (Tharpaling Shedra) という高等仏教大学が建っている。そこから先の道は二手に分かれる。下



図40 チュードラ寺 傷痕を残す岩場の一枚岩

手側の道を進むとシュダ寺に行き着く。絶壁に面する中庭の中央にチオルテンを配し、その3方を本堂等取り囲んでいる。崖寺という名にふさわしい迫力のある中庭に圧倒される。

一方、上手は「天国への道」と呼ばれる岩場で (図40)、崖に面する比較的広い平場にチュードラ寺の境内がある。標高は3,800 m。2棟の本堂をはじめ多くの建物を造営している。調査時、本堂ではプージャ (儀式) の最中であり、僧・尼僧・礼拝者でごった返していた。崖に面しているが、平場が広いからなのか、瞑想施設ツァムカンは洞穴と複合しない懸造の建物ばかりであった。

チュードラ寺もまた8世紀にグル・リンポチェが瞑想した場所だと寺伝にいう^{*17}。虎に乗ってやってきたという伝説がここにもあって、グルと虎は崖の岩に痕跡を残していったと伝承される。実際、崖をみると、ほぼ垂直の一枚岩にかすかな溝が刻まれている。虎が引っ掻いた傷跡とされる。

1234年、チベットから布教に訪れたドゥック派の僧ロレパ (1187-1250) がこの場所に僧院を建設することを決めた。グル・リンポチェにゆかりのある縁起のよい場所だと考えたのである。しかし、ロレパがチベットに戻った後、僧院は悪霊によって支配され、だれも僧院に近づこうとしなくなった。僧院は荒廃していったが、18世紀になってプナカ地域のシウラ (Siula) 寺から高名な僧ナワン・トリンレ (Ngawang Trinley) がこの地を訪れ、悪霊を浄化し、僧院を復興したとされる。

4-3 クンサンドラ尼寺

(1) ペマ・リンパとニンマ派再興

クンサンドラ (Kunzang drak) 尼寺はブータンのタン溪谷北側に聳える高山に位置する (参考サイト6・8 / 図41)。標高2,600 m~3,150 mの中腹の絶壁に僧院の建物が点在している (図42)。クンサン (Kunzang) とは崖の名前である。それが崖寺の名前にもなった。クン (Kun) は胸、サン (zang) は悟りを表す。「心の中の仏」を意味する寺名であろう。崖下の平場に沿って東西に建

物が連なっている。下からクンサンドラを見上げると絶壁ではあるが、周囲は意外と開けている。ニンマ派中興の祖、ペマ・リンパ (Pema Lingpa) が1488年に開山したとされる。ペマ・リンパの生まれたチュルの村から徒歩で急な山道を登る。下から見ると絶壁だが、周囲は案外開けている。

僧院の中心はワンカンである。もとはペマ・リンパの住む僧房であった。それが本堂に転じて、1,000の目と1,000の手を持つ観音菩薩を祀っている。ワンカンの上側にあるタクセ・ダワイは僧院に住む高位の尼僧が瞑想する場所として使われている。その上にあるドゥブカン (dubkhang) は崖の洞穴と複合しており、ここも瞑想場である。これら3棟の東側にやや離れて建つジムカン (zimkhang) は僧房であるが、もとはペマ・リンパの息子ダワ・ゲルツェンが瞑想した施設であったという。ジムカンの反対側 (西側) にやや離れてカンドマ・ラカン (khandoma lakhang) が建つ^{*18}。ペマの像を祀る開山堂である。カンドマは「天使 (angel)」を意味する。2015年8月末に調査したタン溪谷のリモチェン (Remchen) 寺の本堂では、内陣中央にグル・リンポチェを祀り、その左右手前にブータンとネパールの「天使 (angel)」を配していた。ここにいう天使とは「妻」とほぼ同義だという^{*19}。カンドマ・ラカンはペマ・リンパの妻たちと係わる施設かもしれない。

(2) ペマ・リンパとメンバ・ツォ

中世期にあって、ニンマ派 (古派) を保守する一群の僧がいた。ペマ・リンパ (1450-1521) はその代表者である。ペマが開山したクンサンドラ寺から山を下ったところにメンバ・ツォ (Membar Tsho) がある (図43)。メンバ・ツォは「燃える湖」と訳されるが、そこは湖ではなく、タン溪谷の淵であり、ペマ・リンパ伝説の舞台となった。夢の中にグル・リンポチェが現れ、ペマは宝の所在地を教わった。その後、衆目の前で手に松明を持ったま

まメンバ・ツォに飛びこみ、水底から仏像・経典・宝物を手にして戻ってきた。そのとき、松明は消えることなく赤々と燃え続けていたのである^{*20} (図53)。

チベット仏教、とくにニンマ派には、パドマサンバヴァが密かに隠して封印した経典を現世の高僧が地下や水底から発見するという埋蔵法典 (テルマ) の信仰があり、その発見者はテルトンと尊称される。メンバ・ツォの伝説はテルトン・ペマ・リンパの誕生を雄弁に物語り、ニンマ派の復興を印象づける逸話の代表である。

4-4 ウラ集落と古寺・瞑想場

(1) 遊牧民の定住集落

ウラはブータン西郊に位置する標高3,050mの高地集落である (図44)。集落は峰々に囲まれ、山の広大な斜面が牧草地で、牧草地と集落の間に赤紫の花を咲かせた蕎麦の畑がひろがる。東西縦貫道路 (標高3,095m) から一望するウラ集落の景観は圧巻である。ブータンの伝統的住居集落の造形力に圧倒されるが、屋敷の配列がグリッドパターン (方形街区) になっていて、そう古くない時期の成立であろうと推察された。聞けば、今から半世紀前に誕生した集落だという (図45)。当時の王が遊牧民にウラの土地を与えたことで、遊牧民の定住が始まった。2014年現在で45世帯がこの地で半農半牧の生活を営んでいる。村の一番高い所に新しいラカン (僧院)



図41 蕎麦畑からみたクンサンドラ尼寺

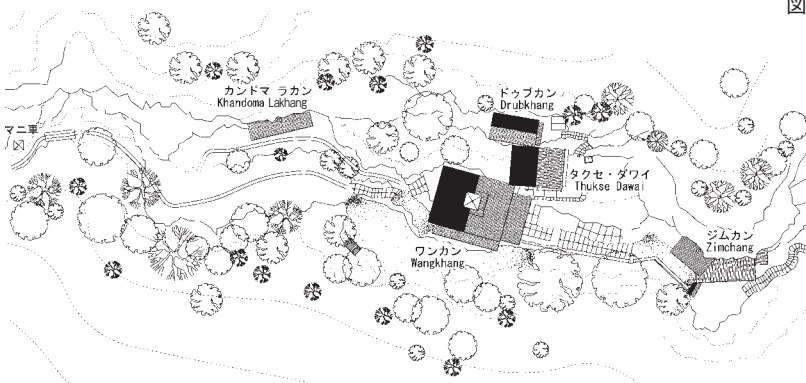


図42 クンサンドラ尼寺 屋根伏図



図43 タン溪谷 メンバツォ (Membar Tsho)

が建ち、その東側の緩斜面に民家が軒を連ねる。民家は二階建てで、外壁は割り石を積み上げ、屋根はトタン葺きがほとんどだが稀に板葺置石の古い形式もみられる。ウラは新築の家も伝統的なスタイルを遵守しており、まるで絵に描いたような風景がそこにある。

僧院はグル・ラカン、あるいはウラ・マンギ・ラカンとも呼ばれる。集落の成立からやや遅れ、1986年に建立された。本堂正面は東向きになっており、入口は北側にある。本堂は平屋建てで、ラカン内部の仏間中央に大きなパドマサンバヴァの像が鎮座しており、ニンマ派の説話などを壁画に描く。ドゥク派の拠点西ブータンであり、ブータン以東の地はもともとニンマ派（古派）を継承する僧院が少なくない。

(2) ガデン・ラカン

ウラ・マンギ・ラカンから北に約1km離れた所にガテ



図44 ウラ集落 全景

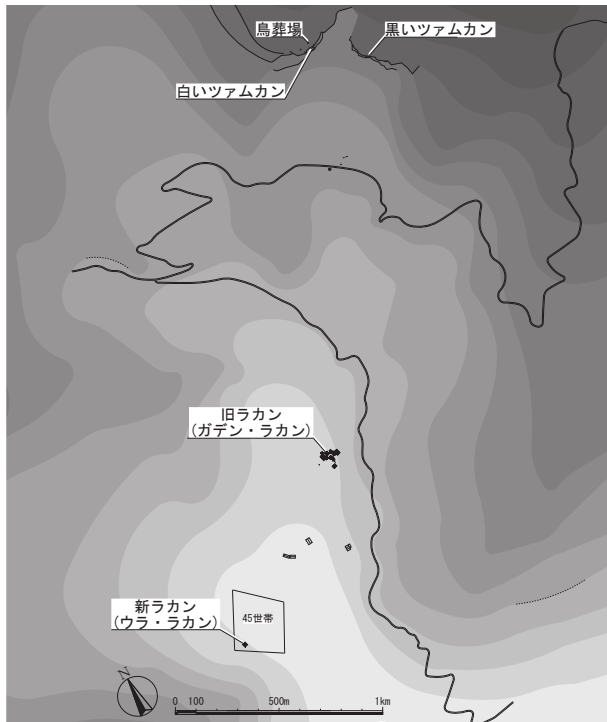


図45 ウラ 集落・ガデンラカン・瞑想場の位置関係

ン・ラカンがある（参考サイト7／図46・47）。集落内に新ラカンを建立する以前からこの地にあった古いラカンで、創建は17世紀ごろまで遡りうるといふ。半世紀前まではテントを折り畳みながらあちこちで放牧する遊牧民たちがいて、ガテン・ラカンに参拝していたのである。本堂は2階にあり、内陣西壁の中央にグル・リンポチュエの坐像、左右に赤と群青の忿怒像を安置し、南・北の壁面にタンカ（仏画）を描く。2階中央の内陣に4本柱を立て、礼拝のスペースを広めにとっている。

(3) 瞑想場と鳥葬場

ウラ・マンギ・ラカン及びガデン・ラカンの周辺に瞑想場はない。どこにあるのかと訊ねると、村人は集落とは真反対の北方を指さした。遠くに切り立った崖が小さくみえる（図48）。調査隊の測量器材は測定距離の限界が700mだが、レーザー光線がまったく届かない。結局、ベンチマーク（基準点）を4回移動して崖に迫っていった。その結果、ガデン・ラカンから瞑想場の岩場まで約2.5km隔たることが分かった。瞑想場はガデン・ラカンよりも古い時代に成立している。パジョ・ドゥゴム・シクポの時代（13世紀）に瞑想場が開山し、17世紀ごろガデン・ラカンが創建されたという。

崖のある山の麓までくると、崖は中心線で左右が手前に折れ、緩いV字をなしている。内側に折れ曲がった2枚の屏風のような形である。その左右の崖面に1棟ずつ



図46 ガデン・ラカン 外観

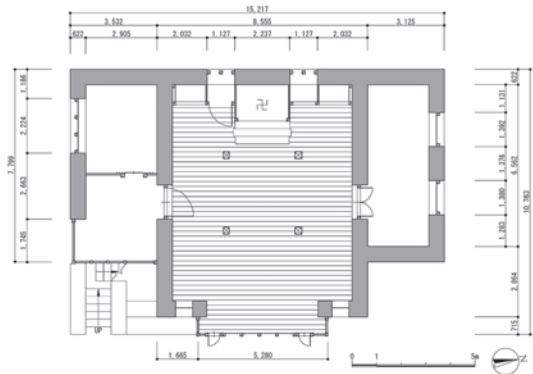


図47 ガデン・ラカン 2階平面図



図48 ウラ 山麓から見上げた崖（瞑想場・鳥葬場）の全景

小振りの建物がへばり付いている（図48）。この2棟がガデン・ラカンの瞑想場である。ここではドラフではなく、ツァムカンと呼称している。向かって左のツァムカンの壁が黒く、右のツァムカンの壁が白く塗られている。これまで何度か述べてきたように、黒色は悪霊浄化の瞑想をおこなう場所であり、白色は瞑想によって善行を積む修行の施設である。

白いツァムカン上の頂きに旗が棚引いていた。そこは鳥葬場である。鳥葬はチベット仏教における代表的な葬法の一つである。天に近い場所で亡骸をぶつ切りにし、ハゲタカやカラスの餌にする。鳥は肉をくわえて空に飛び立つ。亡骸が天へと旅立つのである。現在では火葬が主流となっているが、今でも一人二人であれば背中に担いで鳥葬場へ上がり、葬式をおこなうことがあるという。その鳥葬場が白いツァムカンの上にある。火葬の場合、肉体は煙とともに昇天し、遺灰は川に流す。鳥葬・火葬のいずれにおいても、遺骨・遺灰が存在しない。そのため、ブータンには墓がない。

5. 瞑想洞穴をめぐる予備的考察

5-1 ラカンの成立前後

(1) ラカンとゴンパ

8世紀以前まで遡りうるキチュラカンやジャンバラカンなどの寺名をみれば明らかなように、ラカン (lakhang) は「僧院」または「寺院」をさす言葉として使われている。しかし、僧院の中で本尊を祀る「本堂」のこともラカンという。ラカンの原義は本堂と僧院のいずれであろうか。この問題を考える場合、lakhang に含まれる khang という語彙が示唆的である。僧侶の瞑想するツァムカン (tshamkhang) やドゥブカン (dubkhang)、僧侶の住む長屋ジムカン (zimkhang)

などに含まれる khang は建築空間を意味している。とすれば、ラカン (lakhang) もまた一定の建築空間をさすべきであり、原義としては僧院よりも本堂がふさわしい。僧院としてのラカンは「本堂ラカンを有する聖域」ということであろう。

タンゴ寺でのヒアリングによると、本堂ラカンのことを古くはゴンパ (geompa) とも呼んだ。ゴンパもラカンと同じく僧院 (寺院) の呼称として今でもよく使われている。たとえば、「チュードラ・ゴンパのラカン」なら「チュードラ寺の本堂」と訳すべきであろう。

ラカンやゴンパが本堂と僧院の呼称を兼ねている事実を軽視できない。本尊 (仏像) を祀る本堂を備えることが僧院 (寺院) の条件と推定されるからである。

(2) 瞑想場と本堂の前後関係

第1次調査 (2012) から第4次調査 (2015) まで一貫してインフォーマントの役割を務めたウタム・ガーレイ氏 (注12参照) は、「サブドゥル・ナマン・ナムキュルによる国家形成期 (17世紀) 以前、崖寺に本堂は存在せず、ただ瞑想場だけがあった」ことを何度も強調した。実際、パロのダカルポーゲムジャロ寺における本堂部材の放射性炭素年代は18世紀以降を示している。もちろん、これだけの資料で何かを実証できるわけでもないが、少なくとも国教のドゥック派僧院については、13世紀の瞑想場開山、17世紀以降の本堂建立というプロセスがブータン人にとって半ば常識になっている。こうした歴史観を反映する僧院は、ダカルポ、チェリ、タンゴ、タグツォガン、ゾンドラカなど、ドゥック派の拠点である西ブータンに集中して存在する。

洞穴における瞑想三昧の起源は、いうまでもなく、8世紀のパドマサンバヴァ (グル・リンポチェ) まで遡る。

パドマサンバヴァはチベットとブータンに密教を伝え、ニンマ派（古派）の開祖となった。密教の根幹に瞑想がある。洞穴での瞑想修行である。ニンマ派の拠点は西ブータンのタクツァン僧院であるが、ここに本堂ラカンが築かれたのは1692年のことであり、上記ドゥック派の歴史的展開と軌を一にしているようにみえる。しかしながら、本堂奥の2棟の建立は12～13世紀まで遡るとい（1998年全焼・2004年再建）。ドゥック派とはやや様相を異にしていることが分かるであろう。

中央ブータンにはパドマサンバヴァ瞑想の伝承を残すニンマ派（もしくは旧ニンマ派）の僧院が少なからずある。シュクドラ寺にはパドマサンバヴァの手足の跡、チュードラ寺の崖には飛来した虎の爪跡が残り、クルジェラカン本堂内陣中央奥にはパドマサンバヴァの体形にあわせて掘り込んだ洞穴があって、グル・リンポチェ像を安置している。ブントン郊外タン溪谷のリモチェン（Remochen）寺^{*21}にもグルの開山伝承があり、住職は本堂の創建が17世紀以前に遡る可能性を示唆した。ニンマ派中興の祖、ペマ・リンパが1488年に開山したとされるクンサンドラニ寺も本堂創建が17世紀以前に遡るであろうと聞いている。

(3) ソンツェンガンボ開山寺院

すでに述べたように、キチュラカン（パロ）とジャンバラカン（ブントン）は吐蕃の王ソンツェンガンボが7世紀後半に開いたとされるブータン最古の古刹である。パドマサンバヴァが密教を伝える以前に成立した顕教の僧院であり、2寺とも溪流に近い平場に境内を構える。2015年の第4次調査では、ジャンバラカン本堂内陣2本柱のうち北側の柱脚部に最外層年輪のチップを採取した。放射性炭素年代測定にかけるとの予定であり、ソンツェンガンボ開山の縁起に一定の解を導けるかもしれない。

以上みたように、17世紀の国家形成期以前に本堂ラカンを有する僧院がまったく存在しなかったわけではない。しかしながら大きな流れとしては、パドマサンバヴァの密教伝道以降、岩崖の洞穴を利用した瞑想修行が活発になり、それは本堂ラカンが境内の中心的位置を占める時代になってなお密教修行の根本であり続けている。

5-2 石窟寺院からみた瞑想洞穴

(1) 僧坊窟と瞑想洞穴

釈迦入滅後、釈迦の存在は法輪・菩提樹・仏足石などによって象徴的に表現されていたが、紀元1世紀ころのクシャーナ朝の時代から仏像が制作され、寺院の本尊となる。偶像崇拜の始まりである。パドマサンバヴァが、

ブータンに密教をもたらした時代にも仏像は存在したわけだが、パドマサンバヴァは偶像崇拜に依存することなく、洞穴での瞑想修行に重きを置くことをタクツァン僧院等における自らの行を通して弟子たちに伝えた。

これを石窟寺院の側からとらえてみよう^{*22}。一般的に石窟寺院はチャイティヤ窟（礼拝窟）とヴィハーラ窟（僧坊窟）からなる。僧坊窟は多くの小部屋（就寝窟）が中央の瞑想場を取り囲む。僧坊窟を瞑想窟と呼び変えて大過ない所以である。紀元前3～1世紀ころまで遡る西インド初期の石窟寺院では、塔や仏像を祀る礼拝窟は存在せず、複数の僧坊窟のみで構成されていた。僧侶は石窟の中で瞑想三昧の修行生活を送っていた可能性が高いであろう。紀元前後から窟内にストゥーパ（塔）を安置する礼拝窟が出現する。仏舎利を埋納するストゥーパが釈迦の代替物であることはいまでもない。こうしたストゥーパを祭祀対象とする礼拝窟が徐々に僧坊窟群に紛れ込んでいく。仏像を祀る礼拝窟は4世紀ころようやく出現する。こうして石窟寺院における主役は礼拝窟が僧坊窟に取って代わり、僧坊窟はインドから中央アジア^{*23}では礼拝窟の付属品のようにして存続するが、雲岡に代表される中国の大型石窟寺院では礼拝窟だけとなって、僧房は地上に建設されるようになる。

ブータンの瞑想洞穴は僧坊窟、本堂ラカンは仏像を祀る礼拝窟に相当する。石窟寺院が僧坊窟群としての当初の機能を弱め、礼拝窟に傾斜していったのとは対照的に、ブータンの崖寺においては瞑想洞穴の比重が今なおきわめて大きい。何度も繰り返すことになるけれども、それは仏塔・仏像などが出現する以前の古代インド仏教、あるいは初期の石窟寺院のあり方に通じるものである。

(2) 瞑想の実態

ティンブー郊外に位置するチェリ、タンゴ、ドレイの三山は仏教大学、あるいは大学院としての役割を果たしている。チェリ寺で調査中、教授クラスの老僧が若い僧侶数名を引き連れて測量基準点まで上がってきた。日本を訪問して帰国したばかりの老僧と話が弾み、一か八かで瞑想の姿勢を撮影させていただけないか、とお願いしたところ、老僧はこれを快諾され、瞑想修行を終えた若い僧に瞑想の姿勢をとるよう指示した。そのときの写真が図49である。座禅の姿勢とよく似ているが、座禅よりもリラックスした坐りかたである。瞑想中における一日の生活は、すでに述べたとおり、1日1食、睡眠5時間以外はただひたすら瞑想という過酷なものである。ちなみに、瞑想は3年3ヶ月3日と決まっているわけではない。10年以上続けた僧もいれば、死ぬまで瞑想をや

めない僧もいるという。

チェリ寺での聞き取りはやや曖昧なものであり、2015年の第4次調査では何名かの僧と尼僧に自ら体験した瞑想の詳細についてインタビューした。ここではティンプー郊外タンディネ (Tandiney) 寺の住職ラマ・ドルジ (Lama Dorji) の説明を紹介する (図50)。

ラマ・ドルジ (67) はブント市カルチュ寺の上手にある村で生まれた。8歳の時、トンサ・ゾン (Trongsa Dzong) 内の寺院に出家し、ここで5年間、仏教の基礎を学ぶ。13歳の時、シムトカ・ゾン (Simtokha Dzong) で仏教の学校が開校すると聞いてティンプーに移る。ここで4年間、仏教哲学を学んだ。17歳の時、同じくティンプーのタシツォ・ゾン (Trashicho Dzong) で祈りの儀式プージャを習得するまで5年間修行。平信者の家での法要を取り仕切るまでになった。23歳でティンプー郊外の高山 (標高3,800 m) にあるパジョディン (Phajodin) 寺に移り、6年間修行。うち3年半、タジドラ (Thaji drak) の洞穴で瞑想を続けた。瞑想修行中の一日は以下のようなスケジュールで進む。

深夜1時から朝9時まで瞑想。お茶を飲んで休憩し、9時半から12時まで再び瞑想。12~13時に昼食。13時から20時まで3度目の瞑想だが、18時から30分ばかり軽食をとる。20時就寝 (睡眠時間は4~5時間)。今と違って食品が入手しにくいので、干した大根や長唐辛子を持ち込んで調理し、湯に溶かしたサンパ^{*24}とともに食べる。瞑想中は時間がないので自分で簡単に調理し、急いで食べた。

その後、タンゴ寺に移って4年、チェリ寺で2年教鞭をとり、ネップ (Nep) の称号を得る^{*25}。この肩書きをもって35歳の時ネパールを巡礼するが、まもなく右手に大けがを負い、1年間ネパールとインドで治療に専念した。しかし、患部の回復は思わしくなく、帰国後ネップ等の職責を辞退してタンディネ寺に隠棲し、一人で山寺を管理している。



図49 瞑想の姿勢 (チェリ寺)



図50 瞑想の姿勢 (タンディネ寺)

(3) 仏像とは何か

仏像の出現は仏教史に画期をもたらした。出現時における仏像とは釈迦の偶像である。もっと突き詰めていけば、釈迦の瞑想する姿を彫刻で表現したものである。その後、幾多の仏像が生まれたが、少なくとも座像については、高僧・聖人・如来・菩薩などが瞑想する姿を表現している。ブータンの場合、パドマサンバヴァ、パジョ・ドゥゴム・シクポ、ペマ・リンパ、サブドゥル・ナマン・ナムキュルなどの高僧が瞑想する姿を表現した仏像が多く、僧院の本堂に祀られている。

瞑想する僧と仏像の関係は、瞑想窟と礼拝窟の関係にもあてはまる。僧坊窟で瞑想する僧の姿をモデルとし、その全体を写し取ることで、礼拝窟が成立したと考えられるからだ。ブータンの場合、瞑想窟での修行を立体的に模倣表現したものは本堂ラカンである。クルジュラカンやシュクトラ寺では、本堂内陣の中央奥に洞穴が存在し、その中にグルを納め本尊としている。洞穴における瞑想の姿を再現したものと考えられる。本尊以外の脇仏についても、瞑想する仏像の周辺に洞穴を表現する場合はしばしばある (図51)。こうした装飾は本堂を洞穴に近づけようとする演出にほかならない。本堂ラカンに先行し、そのモデルとなった瞑想洞穴ドラフの重要性を改めて確認できる。

5-3 生死の境と合一

(1) 天地の境

岩山の崖や巨巖などの特殊な自然物に日本人は聖性を感じ取ってきた^{*26}。それら自体がご神体の場合もあれば、神仏の降臨する依代の場合もある。タンゴ寺の巨巖に相輪を立てたり、急流と道路の接点にチョコマニ (chokor mani; マニ車の水車小屋) を配して五色旗タルチョで荘厳することなどからみて、ブータンにおいても、巨巖や溪流の結節点などの特殊な自然物に聖性もしくは仏性を認知しているのは間違いなからう。

なにより崖寺 (drak geompa) は高山の急峻な崖に貼



図51 千手観音の脇仏群 (中国青海省センゲマンゴ下寺)

り付いて存在する。瞑想洞穴ドラフに至っては、本堂よりさらに上方の、危険に満ちた崖に設置される。とくに注目されるのは、鳥葬場と複合するウラの瞑想場であり、両者は一体として計画された可能性が高い。鳥葬場は天上世界への入口である。亡骸をぶつ切りにした遺体を鳥が天へ運んでいく^{*27}。その真下に瞑想場がある。瞑想場もまた天上世界への入口であり、あるいはまた「天地の境」と言えるであろう。

ウラだけでなく、チュリ寺、ゲムジャロ寺、クンサンドラ寺では瞑想場をツァムカン (tshamkhang) と呼ぶ。筆者らは、現地でのヒアリングに従い、これを「瞑想するための空間」としたが、今枝由郎 (2006)^{*28} は、ツァム (tsham) を「境」と訳している。今枝に倣う場合、ツァムカン (tshamkhang) とは「境の空間」であり、「天地の境」としての瞑想洞穴の象徴性とよく一致する。

(2) 生死の境を超えて

瞑想洞穴ドラフは天上世界に近い高山の崖上に存在する。そこは「天に近い」という観念的な境界領域であるばかりでなく、物理的には危険きわまりない場所である。瞑想洞穴そのものももちろん危険であるが、境内から洞穴に至る道筋もまた危険であって、一歩間違えば崖下まで転げ落ち即死しかねない。瞑想修行中の僧は、いつでも危険に晒され、生死の境にいる。瞑想修行の空間は「天地の境」であると同時に「生死の境」と言うことができるであろう。

そうした境界の世界で僧侶は3年以上に及ぶ瞑想を続ける。かれらは生と死の中間領域に足を踏み入れている。そこでの瞑想の目的とは、その境 (tsham) を取り払い、乗り越えていくことではないだろうか。生きるも死ぬも一つ。瞑想によって得られる悟りとは、そういう超越的な境地をさすものではないかと考え始めている。

【付記】 本稿は2013～2015年度科学研究費基盤研究(C)「チベット系仏教及び上座部仏教の洞穴僧院に関する比較研究」(代表者・浅川滋男)の成果であり、一部に2015年度公立鳥取環境大学教育研究特別助成「中国青海省のチベット系仏教寺院に関する予備的調査研究」(代表者・浅川滋男)の成果を含んでいる。前者(科研)の最初の成果は吉田健人の卒業論文であり^{*29}、本稿は吉田卒論を全面的に改稿したものである。

【注】

1) ブータンの地理・自然については、おもに以下を参照した。Wikipedia「ブータン」の項(参考サイト1)、

金子久美(2012)『地球の歩き方 D13 ブータン 2012～2013』ダイヤモンド社、斎藤英俊編(2000)『ブータンの歴史的建造物・集落の保存のための基礎的研究』科学研究費基盤研究(A)成果報告書, pp. 2-5.

2) 以下、本稿における歴史と仏教に関する記載はおもに今枝由郎(2013)『ブータン-変貌するヒマラヤの仏教王国』大東出版社、同(2003)『ブータン中世史』大東出版社、及び金子久美(2012)前掲注1に従う。参考サイト2～4も参照している。

3) チベットにおいても、パドマサンバヴァの伝えた宗派をニンマ派という。青藏高原におけるパドマサンバヴァの影響はきわめて大きい(図3)。

4) すでに述べたように、吐蕃の王ソンツェンガンボがパロのキチュラカンとブータンのジャンバラカンを造営したと伝承される(図2)。こうした古刹には当初から本堂ラカン(Lakhang)が存在した可能性も当然ある。

5) 浅川滋男編(2013)『聖なる巖-窟の建築化をめぐる比較研究-』平成24年度鳥取環境大学学内特別研究費成果報告書, 鳥取環境大学。

6) 宮脇檀・猪野忍・栗原宏光(1999)『ノスタルジア・ブータン』, 建築知識。

7) 千葉工業大学建築都市環境学科ブータン伝統住居実測調査団(2010)『ブータン伝統住居』ADP(Art Design Publishing)・シナノ書籍印刷, 同(2012)『ブータン伝統住居Ⅱ 中部編』ADP, 同(2012)『ブータン伝統住居Ⅲ 東部編+提案』ADP。

8) 斎藤英俊編(2000)前掲注1報告書。

9) 文化庁文化財部建造物課(2003)『ブータンの歴史的建造物に係る保存修復協力事業報告書—アジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業—』。

10) Kunzang Choden & Dolma C. Roder ed.(2012) *Ogyen Choling - A Manor in Central Bhutan* -, Replika Press Pvt Ltd, India.

11) Kunzang Choden (1994) *Folktales of Bhutan*, White Lotus Co.Ltd., Bangkok. 訳本に今枝由郎・小出喜代子訳(1998)『ブータンの民話と伝説』, 白水社がある。

12) 各僧院等におけるヒアリングは、ブータン・エンカウンター旅行社(Bhutan Encounter travels)の代表兼ガイド、ウタム・ガーレイ(Utam Ghaley)氏が通訳となって僧侶等から聞いた内容に基づいている。出家した僧は僧院での修行に専念するため英語を学習しない(チベット語・サンスクリット語を学ぶ)。ウタム氏は日本語・英語に堪能であり、僧侶の話すゾンカ語等を日本語もしくは英語に訳出してくれる。氏の能力は非常に高く、たんなるガイドというよりもインフォーマント(情報提供

者)に近い存在である。調査対象とすべき僧院についてもウタム氏と協議の上毎回決定しており、ゾンカ語・ブタンカ語などのローマ字表記や発音も氏に従って掲載する。なお、「17世紀のドゥク派による国家形成期以前、崖寺に本堂ラカンはなかった」とする歴史観はウタム氏をはじめブータンの知識人の多くに共有されるものだが、最終章でも述べるように、ニンマ派などの古い宗派には必ずしもあてはまらないところがある。この問題には検証が必要であり、今後なすべき重要な研究課題の一つと考えている。

13) 後述するように、今枝由郎(2006)はツァム(tsham)を「境」と訳している(『ゾンカ語口語教本』, 大学書林.)。現地での聞き取りでは、ツァムカン(Tshamkhang)は「瞑想する空間」と訳された。

14) 2015年9月に再訪したところ、ストゥーパは修復を終えて新装されており、本堂ラカンの壁面も白色と黄色に塗り分けられていた。外壁を黄色に塗装する部分が仏壇を配する内陣に相当する。

15) 2015年9月再訪時では、黒壁を白に塗り替えていた。

16) 金子(2012)前掲注1参照。

17) チュードラ寺の伝説と歴史については、本寺が刊行している案内書(Choedrak Geompa)を参照した。奥付がなく、著者・刊行年等の情報が一切記載されていない。

18) 金子(2012)前掲注1, p. 192.

19) インフォーマントのウタム氏は、初めリモチェン寺の女人像をグル・リンポチェのangelと訳し、次にwife、最後にcomfortと訳しなおした。

20) Kunzang Choden(2012) *Membar Tsho—The Flaming Lake*, Ryang Books in Bhutan(浅川研究室訳『メンバツォー炎立つ湖』, 2014年度プロジェクト研究2 & P4 成果集/内部資料)。2015年8月末、訳本をウゲンチョリン民俗博物館でクンサン・チョデン夫妻(執筆者)に贈呈した。

21) 2015年に調査した僧院であり、本稿での調査成果報告は割愛する。

22) 岡村秀典(2013)「山中の仏教寺院—西インドの石窟寺院を中心として—」(浅川編『聖なる巖』前掲注5、2013, pp. 68-83.)

23) 眞田廣幸・清水拓生・檜尾恵・浅川滋男(2013)「クチャの千仏洞をたずねて」、『鳥取環境大学紀要』第11号, pp. 85-98。(浅川編2012・前掲注5に転載)

24) ザンパはチベット遊牧民の主食である。裸麦の粉を焼き焦がしたもの。湯やヤク乳に溶かし、どろどろにして食べる。日本のはったい粉(大麦粉)に近い。

25) ネップはティンパー地区全寺のマネジメントをする

役職である。

26) 浅川編(2013)『聖なる巖』(前掲注5)

27) 中国青海省青海湖周辺での聞き取りによると、この地方のチベット(蔵)族、トゥ(土)族などは今なお鳥葬を盛んにおこなっているという。これらの遊牧民及び半農半牧民には5種類の葬法がある。火葬・水葬・土葬・鳥葬・塔葬である。火葬と水葬は複合している。火葬の遺骨・遺灰を川に流すので遊牧民は魚を食べない。

28) 今枝由郎(2006)『ゾンカ語口語教本』, 大学書林。(前掲注13)

29) 吉田健人「フィールドワークに基づくブータン洞窟僧院の基礎的考察」(『平成26年度鳥取環境大学・大学院 建築・環境デザイン学科 環境デザイン領域 卒業・修了研究成果集』, 鳥取環境大学, 2015, pp. 34-35)。

【参考サイト】

1) Wikipedia「ブータン」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%B3>

2) 「チベット仏教と幸せの国 ブータンを訪ねて」

<http://fusaiji.com/bhutan/tango.html>

3) 「ブータン・ダイアリー」

http://blog.livedoor.jp/bhutan_diary/archives/3741838.html

4) 「ブータンスタイル」

<http://bhutan.cocolog-nifty.com/blog/2010/05/post-31c7.html>

5) 「Choedrak Monastery - Wikipedia, the free encyclopedia」

http://en.wikipedia.org/wiki/Choedrak_Monastery

6) 「Kungzandra Monastery - Wikipedia, the free encyclopedia」

http://en.wikipedia.org/wiki/Kungzandra_Monastery

7) 「Ura Monastery - Wikipedia, the free encyclopedia」

http://en.wikipedia.org/wiki/Ura_Monastery

8) 「2011年夏ブータンの旅5〜プムタン・タン谷」

<http://4travel.jp/travelogue/10600608>

9) 「ブータン王国 (Kingdom of Bhutan)」

<http://www.gijodai.ac.jp/csas/knowledge/countries/bhutan.html>

※ URL 及び閲覧日は全て2015年8月20日現在

(受付日2015年8月26日 受理日2015年11月30日)

[追記] ジャンバラカン内陣柱の最外年輪(心材型)から1632-1666 cal AD(信頼性74%)の放射性炭素年代が得られた。